

高尾山 歴史の散歩道 51

明治大学博物館

外山

徹

鎌倉河岸奉納の狛犬 2



高尾山に奉納されるはずだったという因縁もある。二日月不動を安置する太宗寺不動堂

本社飯糰権現堂へ登る石階の途中にある狛犬は、寛政三年（一七九一）の江戸湯島出開帳執行のその年、世話人として尽力した江戸鎌倉河岸（千代田区内神田二丁目）講中の寄進によるものである。出開帳は概ね三三年の周期でおこなわれていたが、そろそろという時期に次の話が持ち上がった。

出開帳による町おこし

文政三年（一八二〇）、内藤新宿の福島屋清兵衛を惣代とし、世話人を名乗る九名の連名により、出開帳執行に関わる議定が結ばれている。出開帳にあたっては鎌倉河岸講中のような受入れの組織を必要とし、また、都市在住の信徒集団が出開帳を誘致する事例もあった。この度、名乗りを上げたのが内藤新宿の彼らであった。議定には「宿内繁栄にもあい成るべし」と、新興の宿場における「町おこし」のため出開帳を誘致したいという希望に

薬王院が応える形となったのである。

開帳場に予定された太宗寺は山号霞関山、浄土宗の寺院で本寺は芝増上寺。内藤新宿の名の由来として徳川家康の家臣内藤清成が屋敷地を拝領して居住したことはよく知られる。寛文八年（一六六八）、小さな草庵であった一寺に当主重頼が地所を寄進し、寺号を太宗寺としたと言う。やがて同寺は内藤家の菩提寺となり、門前を中心に町場が発展した。

同年九月八日、高尾山主は新宿の世話人らと会合を持つが、太宗寺が無住となったので、寺社奉行への開帳願いを少し待たせたいという意外な展開となる。開帳願いの案文を披見した寺社奉行松平周防守の公用人野村市左衛門からは、太宗寺からも地所貸出の願書を出すよう指示を受け、兼帯する法類寺院に依頼したところ、やはり後住が決まるまで待てという。

一〇月に入って薬王院もしびれを切らし、場所替えを示唆すると、「誠もって申し訳ござなき仕合」「前段の始末御察しくだされ」「程なく太宗寺より願書差出すべく」と懇願され、ようやく話が進むかと思われたところが、今度は内藤家の目付が故障を申し立てるといふ事態になる。薬王院は尾張徳川家家中の信徒に仲裁を依頼し、尾張家から「その筋」を通して内藤家へ申し渡しがあり、この問題は片が付く。

この開帳願いは、実は年限の三三ヶ年に二年不足するというところもあって、願書提出の遅延は好ましいことではなかった。ただ、松平周防守康任は以前から護摩札を届ける間柄であった。果たして、願いの遅延には度々理解が示され、公用人野村も案じて場所替えを勧められている。康任は寺社奉行（この時は四名）の内寄合でも薬王院からの願書を自ら読み上げるなど配

慮を示していた。出府から二ヶ月半を過ぎた十一月二十七日、ようやく執行の認可が下りる。

新宿出開帳の執行

年が明け、文政四年の二月二一日。まず、護摩木の荷駄から出発。二三日には高尾山主と本尊が伴揃え一九人と近隣の村々からの人足五〇人を従えて出発。山主は翌二四日、本尊の納められた長持二棹は二六日に太宗寺に到着。「富士講中大勢出向き御府内在々で残らずなり」という盛大な出迎えが記される。

太宗寺境内には臨時の社殿が作事され、飯糰大権現と本地不動明王が並べて安置された。「奉開帳飯糰大権現倍増威光利益群生矣」と記された大塔婆が建てられ、八王子講中からの寄進で築山が設けられた。内陣は紀伊徳川家から寄進された三つ葉葵の紋付の水引、戸帳、幕、提灯などで荘厳されていた。講中から奉

納された大提灯が表門と門前横町入口に掲げられ、中でも市川団十郎から贈られた長さ約一メートルの大提灯が二張、呉服商伊豆蔵からの大幡二本をはじめ、六尺（約一・八メートル）から一丈六尺（約四・八メートル）まで大小の小幡一五本が林立するなど壮観な構えとなった。

しかしながら、三月一日に開白した出開帳は、途中、將軍家斉の一七男陽七郎死去にともなう鳴物停止が入るなど、順調ではなかった。紀伊家女中衆の代参などもあったが、残念ながら人の入りは少しくなく、辺り場末の儀にて、その上雨天かたがた参詣薄く助成少なと日延べを願い出る状況となった。記録には「江戸大借金」「実にもって大難波にこれあり」と記されるなど、執行前の苦勞を考えると、誠に報われない出開帳だった。

文政開帳始末

そもそも、湯島の折にも「諸掛り夥しく」「掛り負けにあい成り」「以来江戸開帳は御無用」とされており、収益面での成功は決して容易ではなかった。「諸掛り」の原因としては、方々へ立札を建てる経費、過分な供揃えや折衝先への進物代が挙がるが、開帳場の整備など新宿の世話人の約束が行き届かなかった分を薬王院が補てんするなど、経費が高んだ。

そして、日延べ願いにあるように、やはり両国や浅草といった下町に較べて、人出があるとは言いがたい新開地での開帳であったこと。寺社奉行所の公用人からは「御府外にて開帳の例」は少ないと場所替えを示唆されたくらいで、現在でこそ副都心として繁栄を謳歌する新宿も、この当時は江戸の西の玄関口である四ツ谷大木戸の外であり、出開帳の好適地とは言いがたい場所であった。

この時の薬王院の開帳が不調に終わったのは他の記録にも残りよく知られたようだが、本連載でも度々引用する「高尾山石老山記」『多波の土産』といった紀行文はこの後の文政一〇・一二年に成立することになる。その意味ではこの出開帳のインパクトが全く無かったとも言えないだろう。

記録には「向後新宿より開帳招請これ有りするろうとも、決して新宿にては致すまじくせうろうこと、この義末代までの心得に記し置きせうろう」と繰り返して記されることになった。しかし、その後、明治に入ると、東京市と八王子方面を結ぶ鉄道路線が開通し、昭和に入るとは新宿を起点とする京王電鉄が高尾山麓近くまで延伸し、新宿は高尾参詣の起点として揺るぎない地位を占めることになる。そして、京王高尾線の開通を控えた昭和四二年（一九六七）九月、京王

百貨店において文政からは一四六年ぶりとなる新宿出開帳が執行され、大盛況を博すことになる。世の移り変わりの後とは言え、先人もさすがに未代の変わりようまでは見通せなかった。早すぎる出開帳ではあったが、地元の懇願に応えて出開帳執行を決めたことによる労苦は、現在の新宿と高尾山との縁を考えると、それもまた運命の定めるところかと思われてくるのである。

おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。

◆太宗寺◆

東京メトロ丸ノ内線新宿御苑駅下車
1番出口から新宿通りを渡って徒歩二分

《参考文献》

乾 賢「戦後における高尾山の観光開発―京王電鉄との関連を中心に―」（由谷裕哉編『郷土再考』角川学芸出版、二〇一〇）